

大島郡天城町における日比交流について

田 島 康 弘

(1999年10月12日 受理)

An international exchange between Japan and Philipinin in Amagi town, Kagoshima Prefecture

Yasuhiro TAJIMA

目 次

第1章 研究目的

第2章 県内外のフィリピン人

第1節 日本のフィリピン人

第2節 鹿児島県におけるフィリピン人

第3章 天城町の国際交流

第1節 日比交流

1 交流の契機

2 交流の経過

3 諸問題の発生

4 交流の今後について

第2節 国際結婚の進展

1 国際結婚の増加

2 フィリピン人妻側の一般的状況

3 フィリピン人妻側の事例

4 日本人夫側の一般的状況

5 日比カップルと地域

第4章 天城町における国際化に関する考察

1 国際交流の背景にある構造………従属性と対等性

2 国際化と地域振興との一体性

3 離島の島嶼性について

第1章 研究目的

本研究は、鹿児島県の離島の一つ徳之島の西北部に位置する天城町を主な対象として、離島の「国際化」について検討しようとするものである。

一般に、日本における人々の国際的な交流は、大都市部や工業地区を中心に行われる傾向にあり、農村部における交流は本県における「カラモジア交流」などの特異な例もあるが、一般にはそれほど多くない。

こうした中で、奄美においては一定の国際交流がみられ、天城町のケースもその一例である。

本研究は、こうした現象の背景や基盤、交流の経過と現状、問題点や課題、地域への影響等について検討し、離島における「国際化」の持つ意味について考えようとするものである。

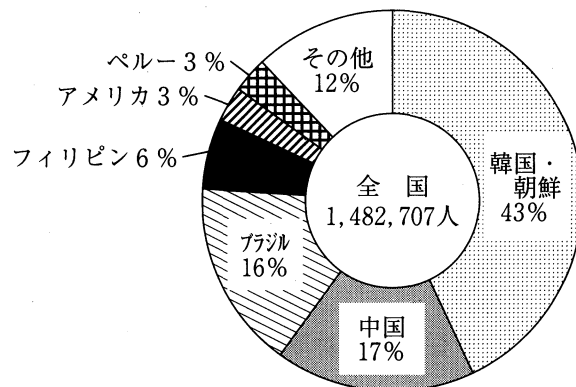
第2章 県内外のフィリピン人

第1節 日本のフィリピン人

日本に居住する外国人は、国籍別では、1 韓国・朝鮮人、2 中国人、3 ブラジル人、4 フィリピン人という順序で、フィリピン人は第4位であり、約9.3万人、全体の6%で、韓国、朝鮮人の64.5万人や、中国人の25.2万人、ブラジル人の23.3万人と比べると少ないが、これら以外の外国人と比べればかなり多く、全体としては多い方だと言える（第1図）。

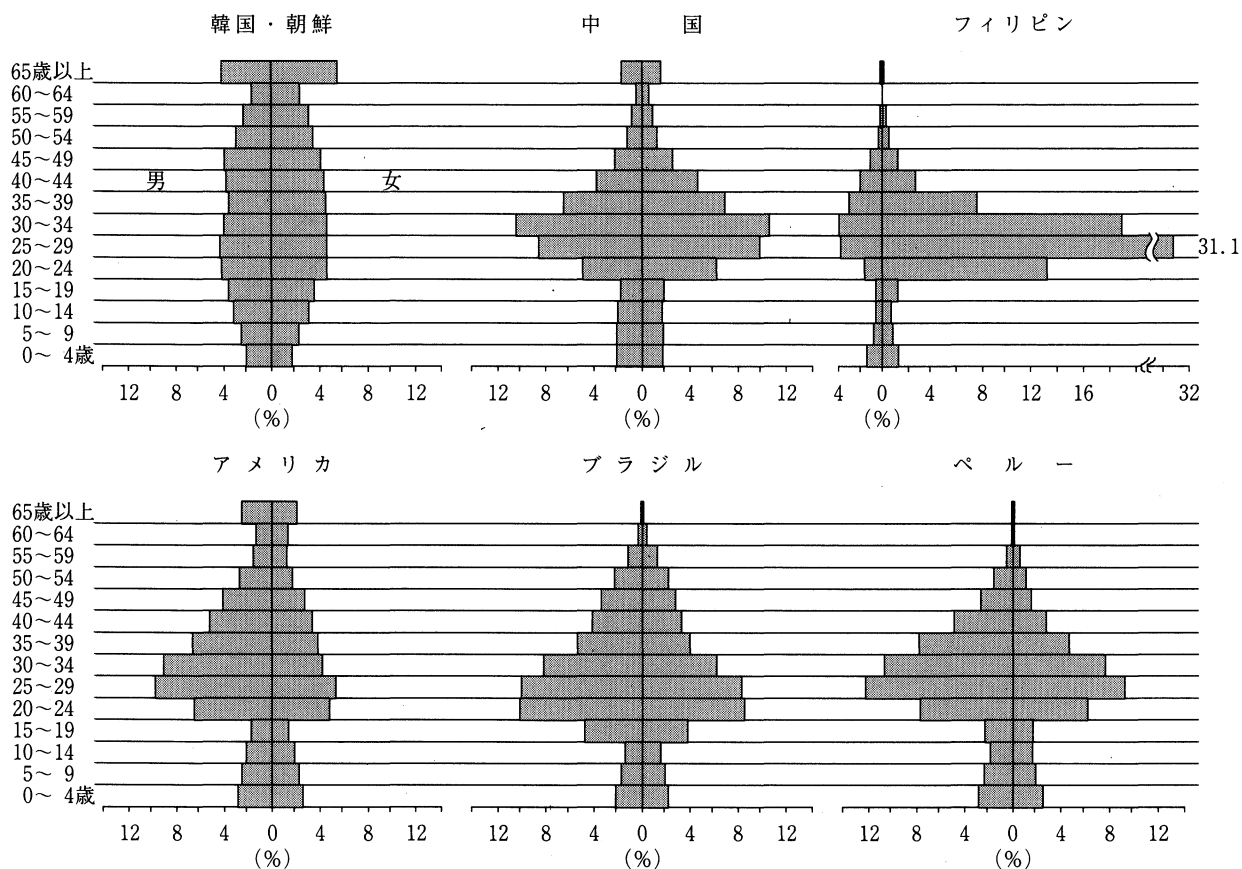
また、このフィリピン人は他の外国人と比べて際立った特徴を持っている。その1つは、性別、年齢別構成で若い女性の比率が極端に高いことであり（第2図）、もう1つは、地域的分布において遍在傾向が少ないという点である（第3-1、3-2、3-3図）。韓国・朝鮮人や中国人が大都市部に集住する傾向が強いのに対し、フィリピン人の場合は地方にも多いのである。

この他、1980年代以降に急増していることも、韓国・朝鮮人などとは異なった傾向である（第4-1、4-2図）。



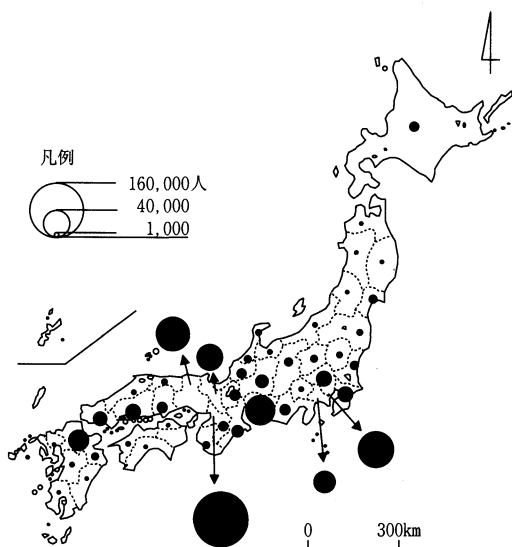
第1図 日本の国籍別外国人数（1997年）

資料：日本統計年鑑



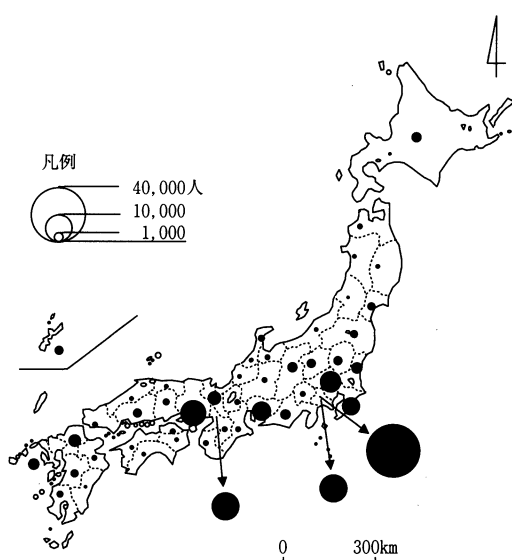
第2図 外国人の国籍別人口ピラミッド (平成7年)

資料：総理府統計局：我が国人口の概観 p119



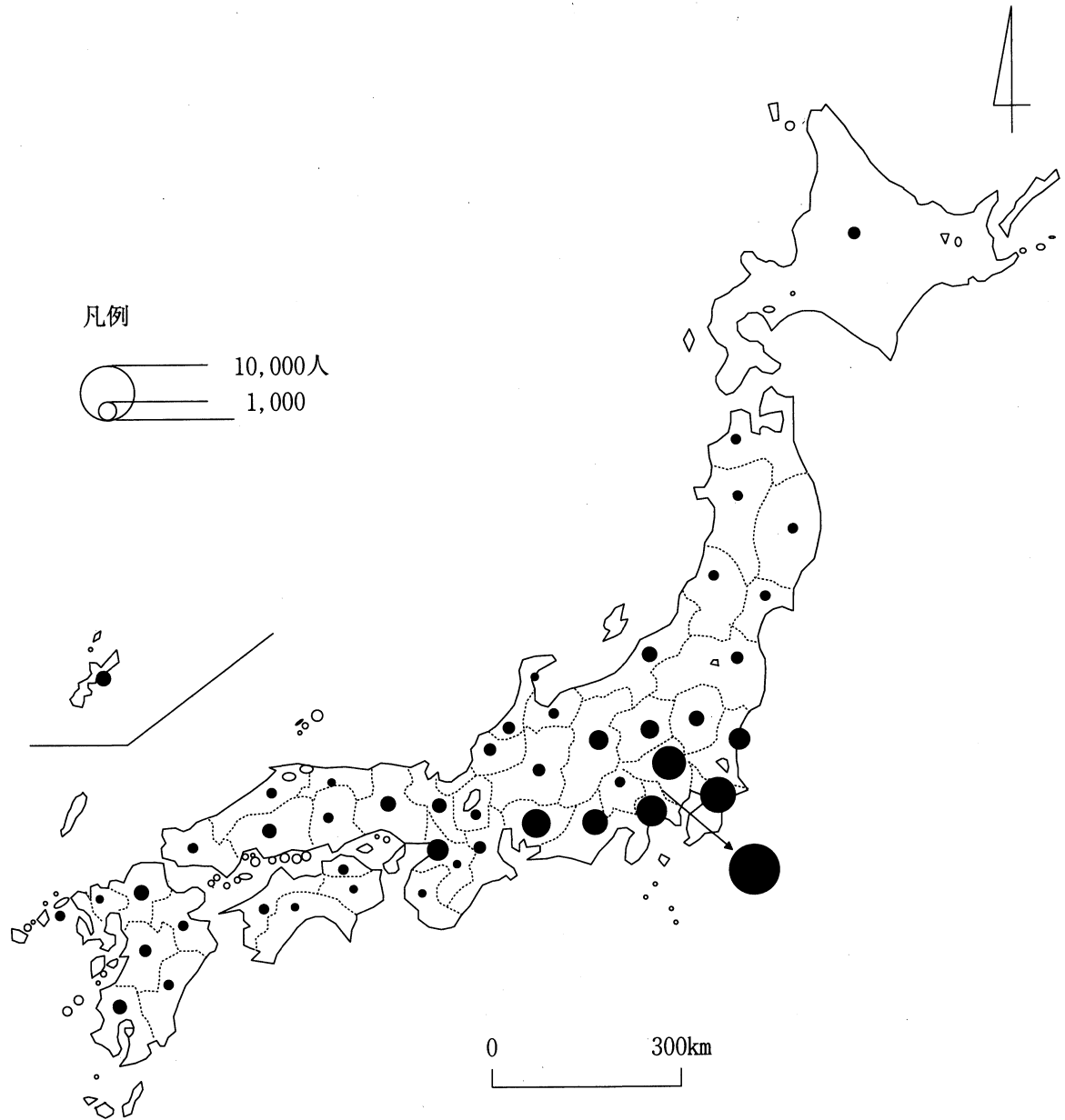
第3-2図 都道府県別韓国朝鮮人の分布 (1990年)

資料：国勢調査



第3-3図 都道府県別中国人の分布 (1990年)

資料：国勢調査



第3-1図 都道府県別フィリピン人の分布 (1990年)
資料：国勢調査

第2節 鹿児島県におけるフィリピン人

1997年12月における鹿児島県内の外国人をみると、1位は中国人で1172人(32%)、2位がフィリピン人で1007人(27%)、3位が韓国・朝鮮人で470人(13%)、4位がアメリカ人で208人(6%)、5位がブラジル人で160人(4%)の順であり、全国と比べると韓国・朝鮮人およびブラジル人の割合が少なく、中国人やフィリピン人、とくにフィリピン人の割合が多くなっている(第5図)。次にこれら外国人の年次別変化をみるとフィリピン人の伸びが最も大きく、1995年、96年には減少したものの90年代前半は県内では最も多い外国人であった(第6図)。

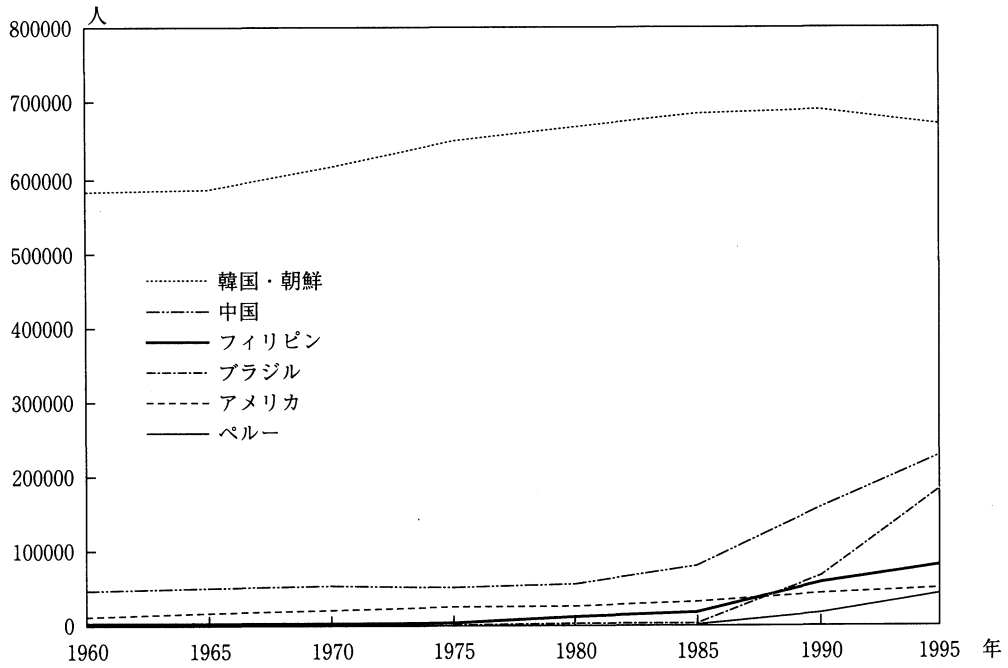
また、全国の部分で指摘したフィリピン人の特質は、県内でも同様に見られる。すなわち、若い

女性が多く(第7-1, 7-2, 7-3図)、ほぼ全県的な分散傾向にある(第8図)。

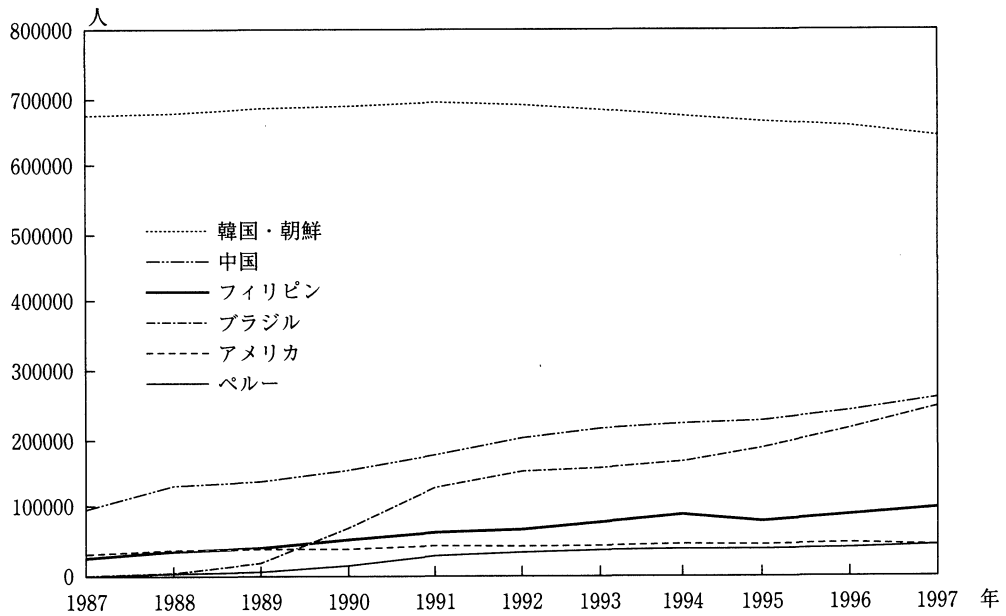
そこで、この地域的狀況を市郡別にみると、市部では鹿児島市、鹿屋市、川内市などに多く、郡部では大島郡、次いで曾於郡に多くなっている、全体では大島郡が最も多くなっている。全県的には分散傾向といえようが、きわめて少ない市郡とかなり多い市郡とがあることから、一定の集中傾向があるとも言えよう。

また、市郡別の変化を見ると、1980年代には鹿児島市に多かったが、1990年代には大島郡が最も多くなってきたことがわかる(第9図)。

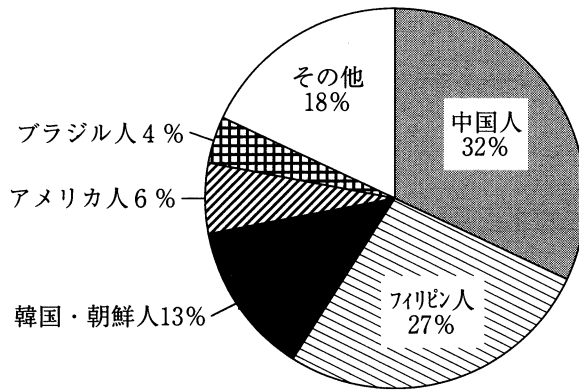
さらに、奄美(名瀬市及び大島郡)におけるフィリピン人の市町村別人数とその変化をみると、2ケタ台の比較的多い市町と1ケタ以下の少ない町村の2つに分類できるように思われ、奄美の中でも全体的な分散傾向の中での一定の集中傾向が見られると言えよう(第1表)。さらに6つの市町のフィリピン人の年次別変化を見ると、90年代初頭では名瀬市や徳之島町に多かったが、その後天城町や知名町で多くなってきていることがわかる(第10図)。



第4-1図 日本における国籍別登録外国人の推移 (上位6カ国)
資料：日本統計年鑑

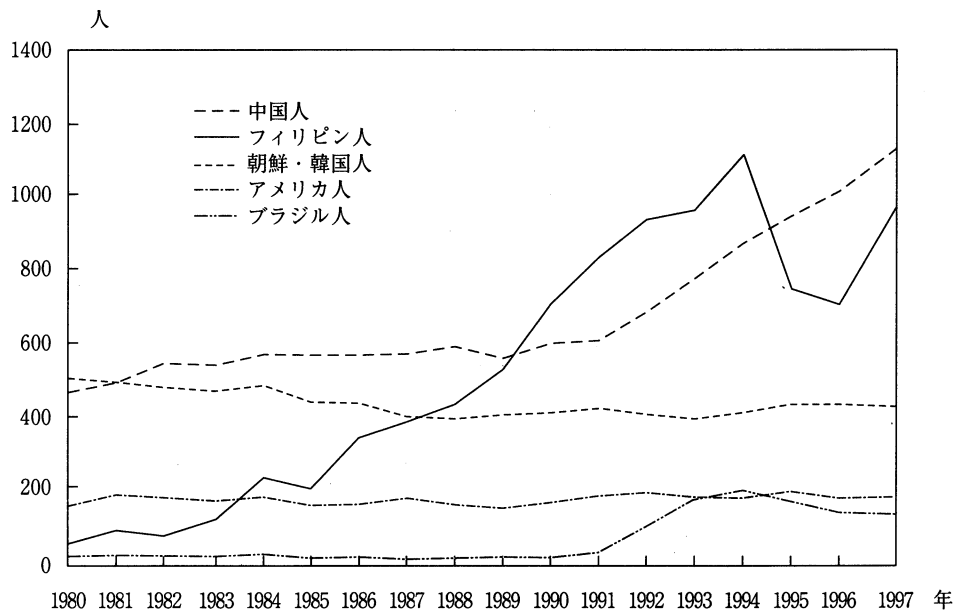


第4-2図 日本における登録外国人の推移 (90年代)
資料：日本統計年鑑



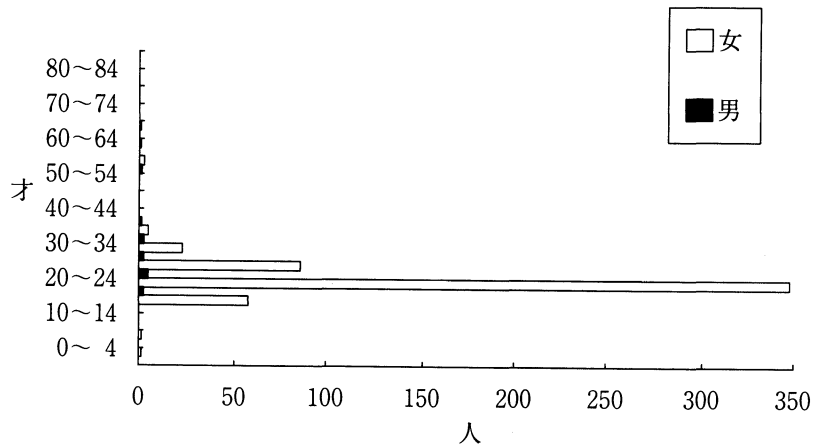
第5図 鹿児島県の国籍別人数（1997年）

資料：鹿児島県統計年鑑



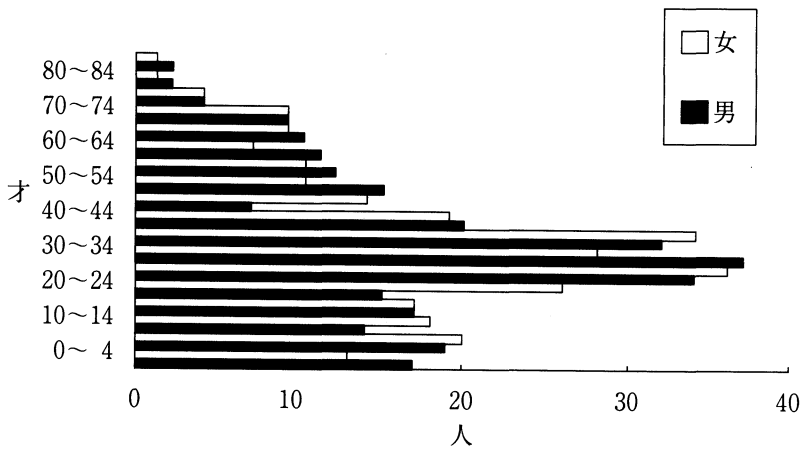
第6図 鹿児島県における主要国籍別外国人の推移

資料：鹿児島県統計年鑑



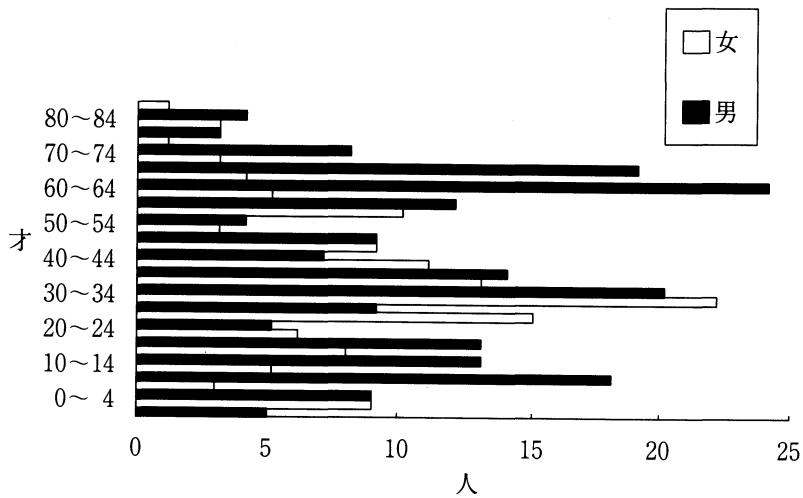
第7-1図 鹿児島県のフィリピン人

資料：国勢調査



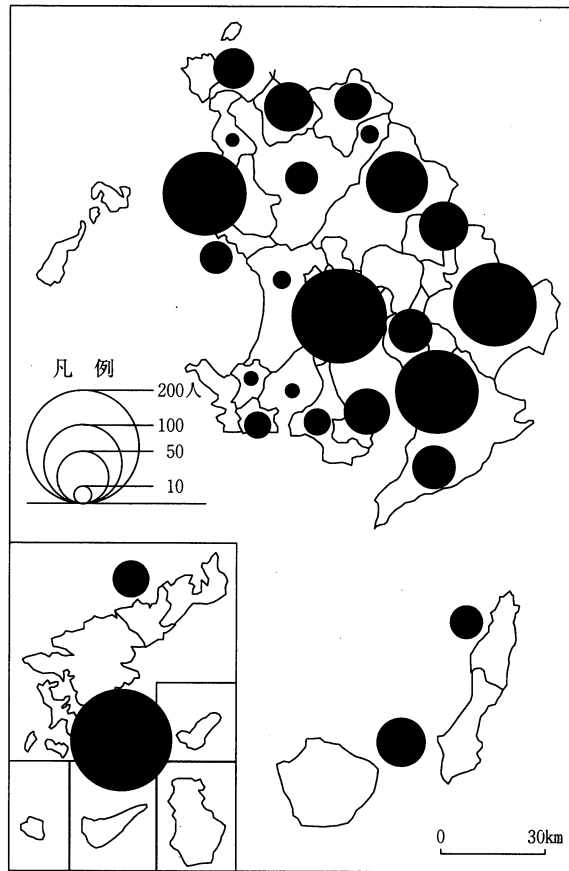
第7-2図 鹿児島県の中国人

資料：国勢調査



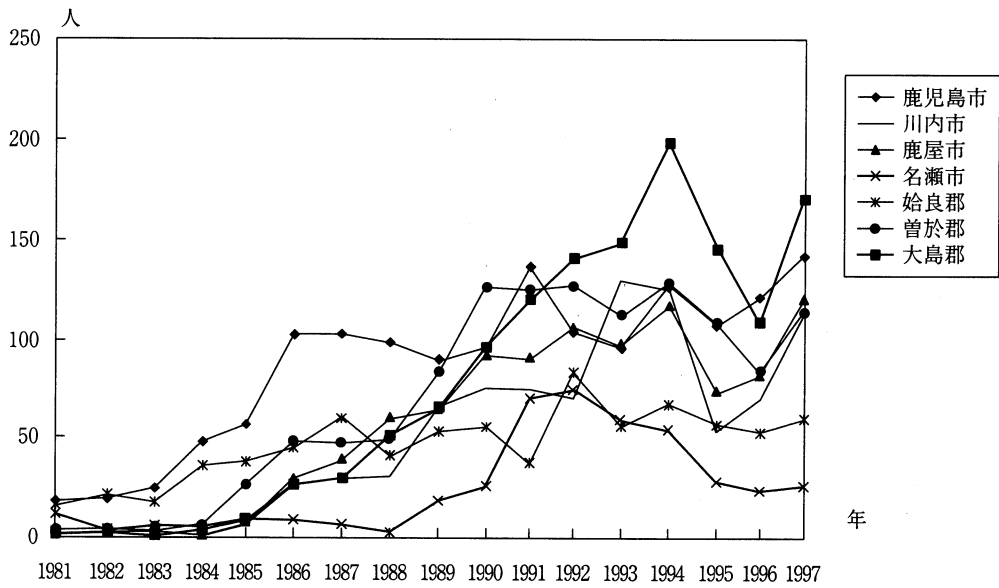
第7-3図 鹿児島県の韓国・朝鮮人

資料：国勢調査



第8図 鹿児島県の市郡別フィリピン人数（1997年）

資料：鹿児島県統計年鑑



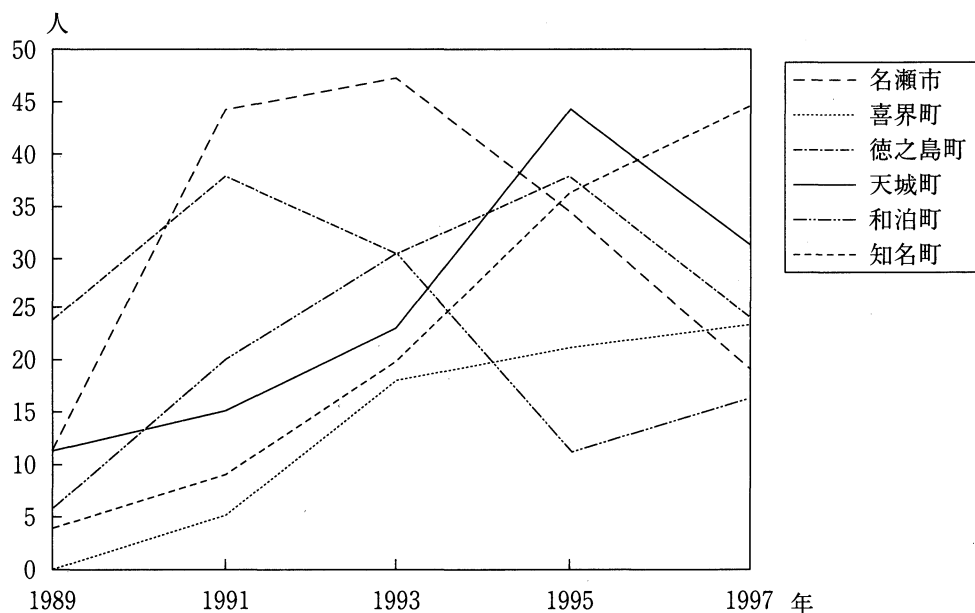
第9図 県内市郡別フィリピン人の推移（上位7市郡のみ）

資料：鹿児島県統計年鑑

第1表 奄美における市町村別フィリピン人の推移

	1989	1991	1993	1995	1997
名瀬市	11	44	47	34	19
大宇瀬住竜笠喜徳天伊和知与				1	
瀬戸内町		1	2	5	
用郷利界町				3	3
徳之島町		1	1	2	3
天城町	24	38	30	21	33
和泊町	11	15	23	38	24
知名町	6	20	30	11	7
与論町	4	9	20	36	44
与論町	4	2	2	2	1
合計	60	135	173	198	183

資料：鹿児島県：かごしまの国際交流，各年度



第10図 大島郡におけるフィリピン人の推移 (多い市町のみ)

資料：鹿児島県：かごしまの国際交流，各年度

第3章 天城町の国際交流

第1節 日比交流

天城町における国際交流にはフィリピンを対象とする以外にも、中学生をアメリカに派遣する「中学生海外派遣事業」や、外国人も含めて毎年行われているトライアスロン競技などがあるが、ここでは天城町最大の交流事業であるフィリピンとの交流に限定してみていきたい。

1 交流の契機

1990年4月、天城町はフィリピンのシライ市と姉妹盟約を締結した。そのいきさつは「ふるさと創成資金を活用した人材育成の一環として同じさとうきび産地フィリピン、ネグロス島のシライ市に町農協長一行12名の使節団を派遣したのを契機に交流が始まり、半年後シライ市から市長一行が来島された折、姉妹盟約の調印が行われた」とされる¹⁾。

ここでは、以上の背景をもう少し見ておきたい。その1つは、なぜ国際交流なのかという点である。この点に関し当時の町長は、生活の場と職場が一致した「いわゆる閉鎖的な社会にわずかでも外の風を吹き込み、島民の目を外へ広げていけないものか模索して」いたと述べ²⁾、トライアスロンなどの国内を中心とした交流も同様の主旨であるという。

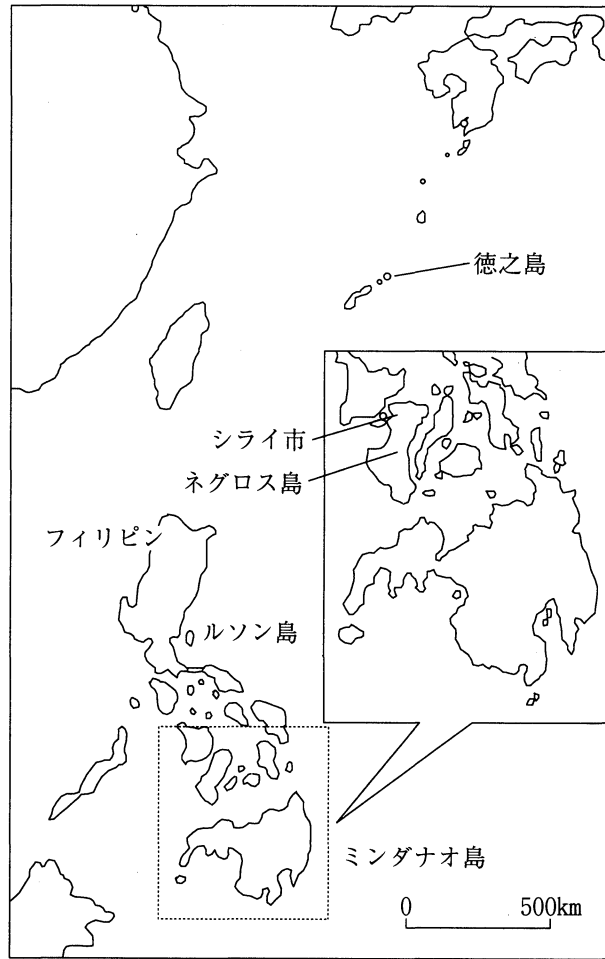
また、なぜフィリピンなのかという点については、南西糖業の存在が大きかった。南西糖業の親会社大洋漁業は、フィリピン、ネグロス島でアジア最大のエビの養殖を行っており、この仲介を通してネグロス島のシライ市が浮かび上がったのである(第11図)。南西糖業としては、当時高齢化の進んでいた徳之島のさとうきび産業の現状の中で、フィリピンからの余剰労働力を導入できないかとの思惑もあったが、この点については、第一回使節団がフィリピン側と交渉した際、「砂糖をもっと日本へ輸出したい」という意向とともに「余っている労働力を天城町に提供してもよい」との考えを受け取っている³⁾(第12図)。

2 交流の経過

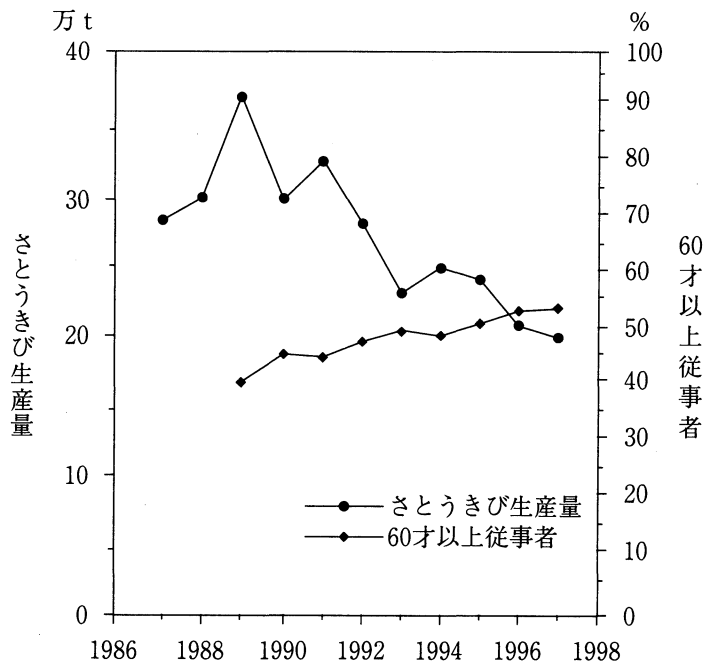
第2表は、天城町とシライ市との交流の人的側面(人間の交流)について整理したものである。ここで大使館関係者は、全員が毎年4月に開催される「フィリピン祭り」への出席者であり、また地方自治体関係者は毎年11月に開催される「自治体国際交流セミナー」の参加者である。この表から以下のことがわかる。

- 1) 天城町からフィリピンへの訪問者は交流の初期に集中しており、交流のきっかけを天城町側が作り出したこと。
- 2) フィリピン側からの来訪者はその過半数を研修生+留学生、とくに研修生が占めており、これが人的交流の中心であったこと。
- 3) 1994年からは「フィリピン祭り」が開催され、草の根レベルへ向けての交流が始まったこと。
- 4) 天城町からフィリピンへの訪問者の中では南西糖業関係者が最も多く、さとうきび経済を中心とした交流であったこと。

なお、当時の議会の反応は「なぜ欧米でなく低開発国なのか」という意向が強く、必ずしも賛成ではなかったが、徳之島は南に近いということで何とかのりきったという⁴⁾。



第11図 フィリピン国シライ市の位置



第12図 徳之島におけるさとうきび生産量と60才以上従事者の割合の推移
資料：南西糖業株式会社概要 (1998年)

第2表 天城町における国際交流の経過

年 月	天城町からフィリピンへの訪問者					フィリピンから天城町への訪問者						
	南西	町	農家	他	計	市	地方	大使	研	留	他	計
1989, 10	5	2	5		12							
1990, 4						4					6	10
1991, 7	7	3	1	1	12							
1992, 1									4			4
11	2	4		2	8		2					2
1993, 1									7			7
11						2						2
1994, 1									8			8
4								1				1
1995, 1									8	3		11
3											3	3
11						3						3
1996, 1									8			8
4								1				1
11							2					2
1997, 4								1				1
11							2					2
1998, 4								4				4
11							3					3
計	14	9	6	3	32	9	9	7	35	3	9	72

注：南西は南西糖業，町は天城町職員及び議員，農家は農協を含む，市はシライ市，大使は大使館，地方は地方自治体で，以上はそれぞれの関係者を示す。また，研は研修生，留は留学生，他はその他（不明を含む）である。

資料：町役場

3 諸問題の発生

1) 研修生の受入れの中止

1992年から，ハーベスターやバイオの技術さらにはさとうきびの栽培技術の習得をめざした研修生の受入れが開始され，1996年まで5年間にわたり計35名の研修生の受入れが行われた。ところがこの頃から入国管理体制が次第に厳しくなり，「名目は研修生だが実際は労働者ではないか」という指摘がされる様になった。町としては「上野などにいる多くの者を放置

しておいて我々のようなものを規制するのはおかしいではないか」などと反論もしたが、結局中止することになってしまった。

2) 留学生受入れの停滞

1990年に結ばれた姉妹都市盟約書には「教育、文化、産業、スポーツ等の交流」についてうたわれている。この主旨に基づいて行われるようになったことの1つが留学生の交流である。1993年11月には、徳之島商工高校とD.M.L.メモリアル高校との姉妹高校の調印式が行われ、1995年1月、フィリピンから同校の3名の留学生が徳之島商工高校に来校し、2ヶ月間学んだ。学習の内容はパソコン操作及びガスの溶接が中心で、授業はすべて日本語で行われたが、生徒同士の会話は英語であった。

この交流で生じた問題は、土、日ぐらいは農作業を手伝ってもらおうとホームステイ先の農家では考えていたのであるが、彼らがフィリピンの地主の息子であったため、全く働こうとしなかったことである。フィリピンではプランター＝農園主は働かないのが当たり前であると言う⁵⁾。こうしたことから、翌年からのホームステイ先を町内のいずれかの農家に頼むことが大変やりにくくなってしまったという。こうしたことがあって、その時点である程度準備が進んでいたこちらからフィリピンへの学生の派遣も中止することとなった⁶⁾。

3) 今年度(1999年度)のフィリピン祭りの中止

フィリピン祭りは、8名のフィリピン研修生の慰労送別、多目的広場の完成、豊年祈願⁷⁾を兼ねて1994年4月、はじめて開催されたもので、町内における草の根レベルの交流をめざしたものであった。

以降、毎年4月に駐日フィリピン大使などの参加も加えて、1998年まで5回継続して開催されてきたが、今年度は中止になった。新町長は「交流のあり方がフィリピンから来るだけという一方通行で町としてのメリットがない。行革の一環として予算から削除した⁸⁾」と説明したという。

4 交流の今後について

以上、天城町のフィリピンとの交流は、新しい道に挑戦する中で紆余曲折をへながら進んできて、現在に至っている。最後にこの交流の将来について考えてみたい。

- 1) まず第1は、国際交流の当初の理念であった内にだけ向けがちな島民の視野を広く外にもむけようという点は、今後も評価されてよいことであり、この間の交流の経過を見ても、この点での成果があったのではないかということである。この点は単に島嶼社会のみならず、我々日本国民全体にもあてはまることであろう。
- 2) 2番目に、交流には相手があるのであって、双方の信頼関係をそこねることなく進めるべきものであるという点である。今まで試行錯誤しながら築いてきた双方の関係を今後も生かし、発展させる道を切り開いていってほしいものである。また、交流の相手であるフィリピン、シライ市は相手としてはきわめてユニークでこれほど個性的な交流は他では見られな

い貴重なものであり、国際交流の本来的な主旨にもあっているのではなかろうか。

- 3) 第3は、以下に述べる天城町における国際結婚カップルの存在である。フィリピンとの交流を深めることは、彼女らやその家族の「心を癒す」ことにつながるであろうし、新しい日本社会のあり方を考えることにもつながるであろう。
- 4) 第4は、「メリットがない」と言われる経済的利害関係についてである。確かに現状では、単純労働力の導入は禁止されていることになっている。しかし、「日本経済に必要な」多くの単純労働力が実際には導入されているという現実がある。日系ブラジル人しかり、タレントとしてのフィリピン人も大差ない存在ではなかろうか。とすれば、さとうきび労働力の導入も当面はいろいろな工夫をこらして、また将来は経済の必要という面から正式に、導入の途が開かれてもよいのではなかろうか。むしろこうした側面を考えて、その実現をはかっていく方向で努力することが課題となっているのではなかろうか。

第2節 国際結婚の進展

1 国際結婚の増加

次に、日比交流のもう1つの側面である国際結婚についてみよう。天城町の広報（「広報あまぎ」）を整理すると、近年天城町では国際結婚をする者がふえており、1980年末以降とりわけ1990年代半ばにおおくなっている⁹⁾（第3表）。

国籍別では、フィリピン、中国・台湾、韓国・朝鮮が多いが、フィリピン人以外はほとんど町内に居住していないという。また、夫と妻のどちらが外国人であるのかという点を見ると、フィリピン人以外は夫が外国人というケースもみられるが、フィリピン人の場合は全員が妻であり、ここにもフィリピン人の場合の特徴が見られる（第4表）。

以下、フィリピン人のケースのみを問題とするが、結婚届出者の中には広報に載せないことを望む者もいるため、実際の数はもっと多いという。町役場によれば、1999年4月1日現在時点でのフィリピン人との婚姻者数は23組であった¹⁰⁾。彼らの結婚した年をみると、広報の資料とほぼ同じで93～96年頃に多いことがわかる（第5表）。

2 フィリピン人、妻側の一般的状況

次に、ききとりを中心にしてフィリピン人妻側の一般的状況について述べてみたい。一般的概況については、町役場企画課で話を聞き、彼女達のうちの2名からは日を改めて個別に面会し、詳しく話を聞いた。その際、喜界町の1例についての文献による報告が大変参考になった¹¹⁾。結果については、どの程度一般化できるかはよくわからないが、以下の点についてはほぼ一般的な傾向であろうと思われる。

- 1) まず、彼女らは結婚に至る前に数回の日本での滞在経験をもっており、これらはいずれも6ヶ月未満の「タレント」としての日本での仕事をするために、興行ビザで来ている。6ヶ月たつと帰国し、しばらくフィリピンで生活して再び日本への「出稼ぎ」をめざすというパ

第3表 年次別国際結婚数

年次	結婚総数	国際結婚数	国籍別結婚数				
			比国	中国・台湾	韓国・朝鮮	アメリカ	その他
1987	244	1	0	0	1	0	0
88	278	3	0	1	1	0	1
89	174	3	1	0	2	0	0
90	161	4	1	1	1	0	1
91	152	4	0	1	0	1	2
92	161	3	0	1	1	1	0
93	205	3	0	2	0	1	0
94	239	7	4	2	1	0	0
95	206	7	2	2	2	0	1
96	243	9	6	2	0	1	0
97	204	4	1	1	1	1	0
98	209	6	1	2	3	0	0
計	2,476	54	16	15	13	5	5

資料：天城町広報 1987年11月 (No.230) ~ 1998年12月 (No.357)。ただし、1991年のNo.277 (6, 7月) と No.279 (9月), 1992年のNo.282 (1月) と No.289 (11月) は欠号。

第4表 国籍別・性別・国際結婚数

国籍	夫	妻	計
フィリピン	0	16	16
中国・台湾	6	9	15
韓国・朝鮮	4	9	13
アメリカ	3	2	5
その他	1	4	5
計	14	40	54

注：その他の内訳はラオス、タイ、ブラジル、チリ、ドイツの各1である。

資料：町役場

第5表 フィリピン人カップルの結婚年

年	カップル数	
	役場届	広報
1987	0	0
88	0	0
89	1	1
90	1	1
91	0	0
92	0	0
93	4	0
94	5	4
95	3	2
96	4	6
97	1	1
98	2	1
99	1	1
不明	1	0
計	23	17

資料：「広報あまぎ」及び町役場企画課の資料より作成

ターンを何回かくり返している。フィリピンでは物価が安く、月5万円もあれば家族を養っていけるので、こうした「出稼ぎ」がくり返される。

- 2) 彼女らはフィリピンでは「選ばれた人達」(K氏)であり、「日本に来られるだけでうらやましがられる存在」(Y氏)であって、短大や大学卒生もおり、また教師、OL、秘書等をしてきた者もある(Y氏)¹²⁾。
- 3) 結婚に至るケースは、日本人男性側がフィリピンへ行って相手の両親に会い、むこうで結婚式や披露宴を行い、届け出をすませたあと日本へもどり、こちらでも披露宴をし、生活を始めるというものであった。
- 4) その後は数年に1度、生まれた子供をつれて里帰りをし、その時は2～3ヶ月滞在する。これ以外にふだんは、年に2～3回両親などと電話で連絡をとっている。

3 フィリピン人、妻側の事例

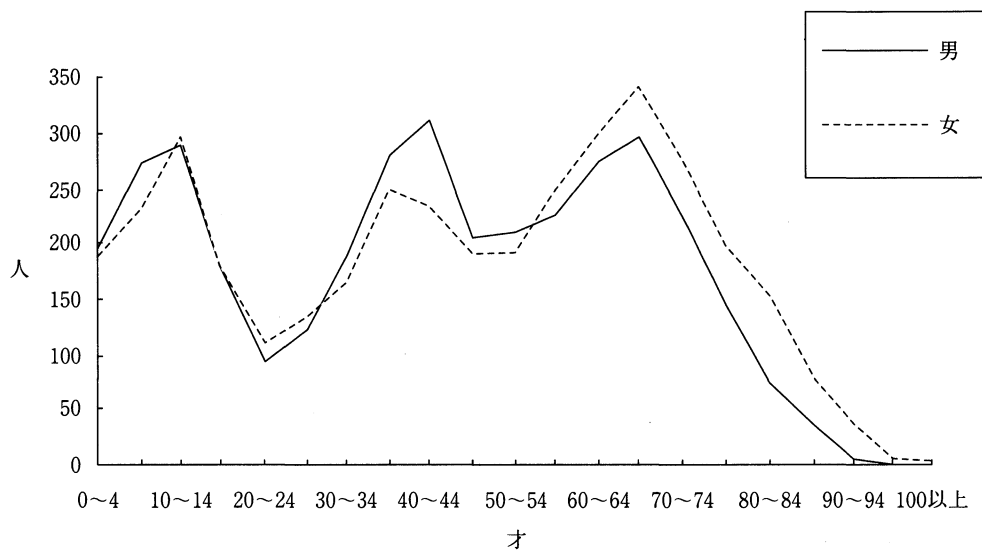
ここでAさんのケースについて多少ふれると、来日は埼玉、阿久根、鹿児島市、天城町の4回で1990年結婚、子供が3人おり、1番上は小学生。帰郷は1995年と1997年で、今年の夏も帰郷の予定である。両親と3人の兄弟がマニラに在住し、「天城町には何もない」と言われたことが印象的であった。また、悩みや相談ごとを出す側であろうと考えていた我々に対し、日本人男性から相談ごとを引き受けることがあるとの話には、さらにびっくりした¹³⁾。

又、Bさんのケースでは、来日は屋久島、沖縄、天城の3回で、1993年に結婚。1996年に1度、1才の子供をつれて里帰りし、現在子供は2人。両親と2人の兄弟がマニラに在住。上の子が幼稚園で、本人は日本語の勉強に熱心に取り組んでいる。天城町は静かで、近所の土地のある人から野菜などがもらえるので暮らしやすいと言う。はじめ、夫の母の理解がなく2年間程苦労した。「ころすともでいわれたことがある」との話が、現実のきびしさを伝えるものであった。

4 日本人、夫側の一般的状況

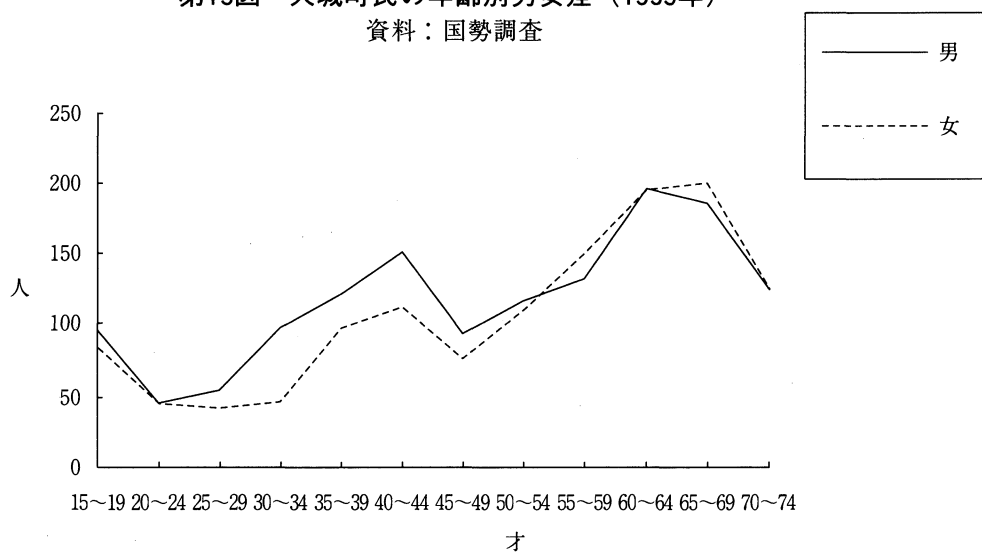
- 1) 奄美において嫁不足ということが言われてから久しい。「こんな田舎でも農家には嫁に行かせない風潮がある」といわれ、その結果、長い間独身でがんばっている男性も多い。一般に中学や高校の卒業生の98～99%は島外に出るといわれるが、このうち男性はやがてUターンする者もいるものの、女性はほとんどUターンをしないという。こうした結果、上述の事態がひきおこされることになるのである。
- 2) そこでこの男女差がどのくらいであるのかを年齢別にみよう。
 - (1) まず町全体の人口で見ると、30～50才の間は男性の数が女性をかなり上回っていることが分かる(第13図)。
 - (2) 次に農家に限定してみると、25～50才の間で男性の方が女性の方よりかなり多くなっていることが分かる(第14図)。
 - (3) ところで、こうした独身男性の人数はどのくらいなのであろうか。ききとりによれば、

こうした独身男性は町内に300~400人いるとも聞いた。幸いに5年おきに発行される農業センサスでは、1995年のものから後継者の配偶者に関するデータをのせている。そこでこれを整理すると、同居している後継ぎのいる世帯は297世帯あるが、このうち跡継ぎが既婚の世帯はわずか18世帯(6%)にすぎず、ほとんどの世帯で後継ぎが未婚であるということが示されている(第6表)。統計による数値も、ききとりの結果とそれほど変わらないことが示された。23組の結婚時点での年齢をみても、フィリピン人女性のほとんどが20代であるのに対し、日本人男性側は30代が最も多く、40代、50代の者もいる。ちなみに平均年齢は、男性が40.0才、女性が25.4才で、その年齢差は14.6才、約15才であった(第7表)。



第13図 天城町民の年齢別男女差 (1995年)

資料：国勢調査



第14図 天城町農家の年齢別男女差 (1995年)

資料：農業センサス

第6表 天城町の家族構成別農家数（1995年）

後継ぎの有無	数	家族構成
同居	297	MF + mf 14
		MF + m or f 204
		M or F + mf 4
		M or F + m or f 75
<div style="text-align: right; margin-right: 20px;"> 18 (既婚) 279 (未婚) </div>		
他出後継ぎがいる	302	MF又は M or F + (mf) 138
		MF又は M or F + (m or f) 164
後継ぎがない	586	MF又はM or F
計	1,185	

資料：1995年農業センサス

注：大文字は世帯主，小文字は後継ぎ，M，mは男性，F fは女性，（ ）内は他出

第7表 日・比カップルの結婚時の年齢

	夫	妻
50代	3人	人
40代	5	
30代	13	2
20代	1	20
不明	1	1
計	23	23

資料：町役場の資料による。

5 日比カップルと地域

国際結婚の増大は、すなわち彼らの間での子供の誕生とその成長を意味する。23世帯のうち、現在16世帯（70％）に、あわせて33名の子供がおり、そのうちの3名が現在天城小学校に通っている。幼稚園児も多い。フィリピン人の妻が日常的に地域（すなわち日本人社会）と最もかわりをもつ場合は、こうした小学校や幼稚園である。天城小学校では、1999年6月15日「創意の時間」を利用して「フィリピンのあそび」を紹介する授業がもたれ、6名のフィリピン人女性がその指導を行った。また、毎年1回、4月に開かれていた「フィリピン祭り」も、地域住民との交流の一つの機会であった。いずれの場合も、彼女らの意見を尊重し、民主的に行った

場合は成功し、そうでない場合はうまく行かなかったようである。

また、彼女達同士で集まる機会として、子供が1才になったときの誕生会を行ったり、日本語教室の時に集まったりしているが、後者は「育児などでいそがしかったりして」現在は中断している。しかし、「彼女らの間に不一致もある」ということも耳にしており、彼女らが全員一致して共同行動をすることはあまりないようであった¹⁴⁾。

第4章 天城町における国際化に関する考察

以上、天城町における日比間の国際交流の実体、内容を、行政を中心とした国際交流と、これを背景としたなかで生まれてきた個人的レベルでの国際結婚についてみてきた。

ここで、こうした現象のもつ意味について考えてみたい。

1 国際交流の背景にある構造……従属性と対等性

本研究で対象とした内容の理解には、いわゆる中心周辺論の考えの導入が有効であるように筆者には思われる。

中心周辺論とは「世界資本主義の構造を統一的に把握しようとする理論の一種で、発達した資本主義国（中心）と発展途上国（周辺）との間に、経済関係を基本にした支配従属の構造があるとするもの」¹⁵⁾で、こうした関係は発達した資本主義国（第一世界）内部および発展途上国（第三世界）内部にも、上記とは別の次元での中心周辺関係がみられるという。

これらの関係を示す最もわかりやすい現象は人口移動であろう。本研究にそって言えば、フィリピンから日本への「出稼ぎ」が国際レベルでの中心周辺（支配従属）関係を示し、また、奄美から関東、関西への人口流出や、フィリピン農村部からマニラなど大都市部への人口移動が、国内レベルでの中心周辺関係を意味する。

こうした関係で捉えたとき、本研究の対象は、とくに国際結婚の場合には第一世界の周辺、天城町と第三世界の中心、マニラとの関係ということになり、フィリピン人の「出稼ぎ」で示される第一世界と第三世界の支配従属関係の側面とともに、第一世界の周辺と第三世界の中心との関係という、もう1つの、どちらかといえば対等、平等的な関係の側面をも持つことになっている。すなわち、本研究の対象には従属性と、対等性の2側面が併存しているように思われる。

第三世界の第一世界への従属を示す若干の例としては、前述のフィリピンから日本への「出稼ぎ」（人口移動）の他に、以下のようなことも指摘できよう。

- 1) 国際交流の相手がフィリピンであることが明らかになったとき、議会は必ずしも賛成ではなく、なぜ「欧米でなく発展途上国なのか」という意見が出されたこと。
- 2) 飲んだ後の2次会で「フィリピンへ行こう」ということになるような現実があること。
- 3) あるフィリピン人の妻が、夫の母から最初の2年間は認めてもらえなかったようなことがあること。

又、従属にはもう1つ、第一世界内部における周辺を中心への従属の側面もあり、これは奄美から関東、関西への人口流出、およびこうした中で生じている奄美における嫁不足、に示されている。

次に、対等性を示す例としては、以下のようなものがある。

- 1) 国際結婚の成立自体が、対等性の最大のあらわれであろう。
 - 2) 筆者もおどろいたことの1つであるが、フィリピン女性が、別のフィリピン女性からだけではなく、夫以外の日本人男性からも相談事を引き受けていること（帰郷した妻の搜索など）。
 - 3) 「天城には（マニラと比べて）なにもない」という彼女らの天城町に対する印象。
 - 4) 自分達はタレントであったという彼女らの意識。
- 2 国際化と地域振興との一体性

次に国際交流の進展、国際化のもつ意味について考えてみたい。天城町における国際化は地域の振興と深く結びついており、地域振興の有力な手段になっているように思われる。

シライ市との交流自体も、高齢化に伴うさとうきび生産減少の問題を労働力の導入によって解決できないか、という意図を含んだものであったのであり、地域経済の回復、発展の方向性をもっていたといえる。

研修生の受け入れも「研修ではなく労働者ではないか」と疑われたそうだが、むしろ労働力としても一定程度受入れられるよう、国の法律改正に向けての努力をすべきなのではないか。日本経済の現状は、様々な分野でこうしたことを要求している状況にあるのではないか。

このほか留学生の交流も、交流した日本の学生に対して「もっと英語を勉強しなければ…」などの一定の刺激を与えている¹⁶⁾、小学校での「フィリピンの遊び」などの交流学习も、子供が国際的感覚を身につけることに一定の役割を果たしているであろう¹⁷⁾。

さらに、フィリピン祭りも文化交流の側面もあり、何らかの形で引き継いで行けば、地域の活性化に有効なものにし得るのではなかろうか。

以上みたように、国際化の諸行事はいずれも地域の振興と深く結び付いている、またはつけられる、ものであるように思われる。

3 離島の島嶼性について

最後に、本報告が日本島嶼学会¹⁸⁾での発表ということもあるので、離島の島嶼性について多少ふれておきたい。

- 1) まず、中心周辺論で言えば離島は周辺の一部である、という位置づけがなされるということである。したがって、中心への従属性など周辺としての性格を、一般に持つであろうことを指摘しておきたい。
- 2) 次に離島の閉鎖性についてである。国際交流が開始された際の理由の一つが、この閉鎖性の克服の問題であった。

かつての奄美は、血縁、地縁関係の強い共同体社会であり、集落毎に言葉や人々の気質ま

でもが違うと言われ、このことが現在でもいわれることがある。出身者集団である郷友会が集落レベルで形成されているのも、こうした集落レベルでのまとまりの強さのあらわれではなかろうか。

せまい社会の中だけでこれからも生活していけるのであれば、こうした閉鎖性もあまり問題にならないのかも知れないが、これからの社会は、外のより広い世界との交流がますます盛んになり、かつ必要となってくるであろう。とすれば、こうした閉鎖性の克服は必要であり、この一手段としての国際交流は、きわめて有効なものと言えるであろう。この点でも、国際交流の新たな発展が望まれるのではなかろうか。

注

- 1) 鹿児島県 (1998) : 「かごしまの国際交流」 p.34
- 2) 「広報あまぎ」第293号(1993年4・5月)
- 3) 「広報あまぎ」第261号(1989年11月)
- 4) 前町長, 寿洋一郎氏からのききとりによる。
- 5) 日本からの訪問団が当地の地主でもあるシライ市の市長宅に招かれたときも, 市長の奥さん自身は全く料理をしなかったという。
- 6) 徳之島商工高校でのききとりによる。
- 7) たまたま前年のさとうきびの生産が台風であまり良くなかったため, この主旨も取り入れられた。
- 8) 南日本新聞, 1999年4月13日
- 9) 「広報あまぎ」の「町民の動き」の部分の中に「いつまでもおしあわせに」という項目があり, ここで, そのときに結婚したカップルの名前の紹介がなされている。ただし, この欄に公表してほしくない旨の申し出があった場合は載せていないという。
- 10) 調査時点 (1999年7月) では, このうちの1組が離婚したため22組となったが, 4月1日現在の数で整理した。
- 11) 得本拓 (1996) : Tの選択, 「榕樹」第12号, pp.28~29。なお, 1999年NHKで放映された日本語弁論大会での発表者の中のフィリピン人女性 (新潟県在住) の話も参考にしている。
- 12) 以上は町役場や天城小学校でのききとりによる。
- 13) 例えばフィリピン人女性と結婚した日本人男性から, 彼の妻がフィリピンに帰国してしまった際に相談を受けたという。
- 14) これには日本人夫側の要素も働いているようである。
- 15) 社会科学辞典編集委員会編 (1992) : 社会科学総合辞典, 新日本出版社, pp.426~427
- 16) 徳之島商工高校でのききとりによる。
- 17) 天城小学校でのききとりによる。
- 18) 日本島嶼学会第2回研究大会, 1999年8月, 鹿児島大学

謝 辞

本研究を進めるに当り、町長の吉岡光一氏や天城町企画課の方々、とくに柳和憲氏、米田俊朗氏には資料の提供のみならず宿泊の件でも大変お世話になった。また、南西糖業の當好二氏、徳之島商工高等学校の前田豊宏氏、天城小学校の川村善良氏、愛甲勝則氏、町立図書館の前田氏や前町長の寿洋一郎氏にも、当事者としての話や、全体的な問題状況など大変貴重な話を伺った。さらに2名のフィリピン女性からは、彼女らならではの新たな視点からの話を伺うことができた。以上の方々に厚く御礼申し上げます。